



茨城県地域臨床 教育センターだより

2012
Vol.03

〒309-1793 茨城県笠間市鯉淵6528 ☎0296-77-1121 平成24年8月1日発行(第3号)

膠原病リウマチ科での治療について



准教授
後藤 大輔

専門領域 ■ 膠原病リウマチ

膠原病リウマチ科は、2010年10月に茨城県立中央病院内に筑波大学附属病院・茨城県地域臨床教育センターが設立された当初から開設された科の一つであります。既にセンター設立以前から県立中央病院内に膠原病リウマチ科はあり、設立前から地域密着の診療、且つ、患者さんに最適な最先端の治療の提供を心掛けて診療をしておりましたが、センター設立後、その思いを一層強く持ち、診療に当たっております。

2011年4月からはスタッフも増員され2名体制(2011年度は廣田智哉医師、2012年度からは高野洋平医師)での診療が可能となり、外来・入院患者の対応も更に充実したものとなってきております。

膠原病・リウマチ疾患の中でも、関節リウマチの診断と治療は飛躍的に進歩しております。具体的には、抗CCP(環状シトルリン化ペプチド)抗体を初めとした血液検査や、関節のMRI検査、関節超音波検査など画像検査での診断の進歩と、生物学的製剤治療により多くの患者さんが寛解を達成することが可能となった治療での進歩という

こととなります。そして、診断と治療の進歩はここに留まらず、今なお、さらに新しい診断技術が開発され、新しい治療薬の研究が進んでいます。

当院でも、これらの最新の診断技術を用いて、関節リウマチを早期の段階から見付け、理想とされる早期からの治療を行っております。治療においては、世界標準となっているメトトレキサート(MTX)を中心とした内服治療に加え、適応となる患者さんには生物学的製剤との併用治療も考慮し、生活の質を低下させる関節破壊を最小限に抑えるように努力しております。(当院での2011年度の各生物学的製剤の使用患者数は表1の通りです。)ただ、むやみに生物学的製剤を使うことはせずに、個々の患者さんのリスクとベネフィットを考え、患者さんにはよく説明して納得いただいた上で、最適な治療の選択を行っております。

関節リウマチ以外の膠原病疾患も、治療法に関する世界中の最新情報を常に入手し、筑波大学附属病院・茨城県地域臨床教育センターにおいても、本院の筑波大学附属病院(つくば市)と同様の最先端で最適な治療方針を選択して診療を行っております。

今後は、診療の更なる充実を図り、茨城県内での膠原病リウマチ疾患治療の中核施設の一つとして更に発展できるように努力していく所存であります。どうぞよろしくお願いいたします。

2012年7月1日



診療スタッフ(病棟でのカンファレンス時)



生物学的製剤の点滴治療開始時の様子

レミケード	15
エンブレル	4
アクテムラ	9
ヒュミラ	2
オレンシア	12
合計	42

表1. 平成23年度生物学的製剤の投与患者数

血液の病気について



准教授
大越 靖

専門領域 ■ 血液内科
■ 造血器腫瘍

皆様は血液の病気と聞いてどんな病名を思い浮かべるでしょうか。貧血、白血病、リンパ腫、骨髄移植、のような言葉はしばしば耳にされるかと思えます。血液は、血液細胞である白血球、赤血球、血小板と、液体成分の血漿（けっしょう）から成り立ちます。血液は全身を循環しながら、病原体から体を守り、酸素を運び、傷口を止血しています。病原体から体を守る仕組みを免疫（めんえき）と言いますが、これは主に白血球がその役割を担います。赤血球は酸素を運搬します。止血には血小板と血漿中の凝固因子（ぎょうこいんし）がうまく協力して傷口を塞ぎ、血液を固まらせます。血液内科は血球の異常や凝固因子の異常を相手にする診療科です。

もっとも多い血液疾患は何かと言えば、貧血、特に鉄欠乏性貧血だと思います。赤血球は細胞のなかにヘモグロビンという物質を多量に含み、これが酸素を運搬します。ヘモグロビンには鉄が含まれていますので、鉄が体内で不足すると赤血球が作られなくなり貧血になります。ちなみに貧血とは赤血球が減少した状態を指します。鉄欠乏性貧血の症状としては、だるさ、息切れ、動悸など一般的な貧血の症状のほかに、人によっては氷をしょっちゅうガリガリ食べる、などの症状がみられます。鉄欠乏性貧血は鉄剤を内服すれば多くはよくなりますが、鉄欠乏に至った原因を調べることも治療と同じくらい重要です。慢性的な出血や失血がないか、食事内容から鉄の摂取は十分かなどを調べ、必要ならその治療を行います。鉄欠乏性貧血はよく遭遇する病気で、その原因もさまざまですから、クリニックをはじめ血液内科以外の診療科で治療されることの方が実際は多いと思われる。

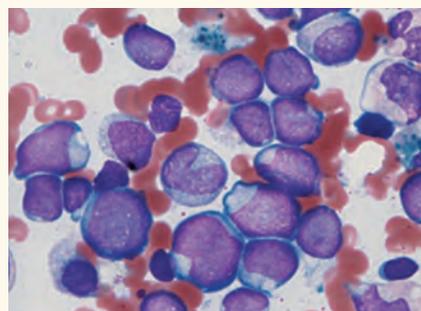
では血液内科が主に治療しているのはどのような病気かと言いますと、造血器腫瘍（ぞうけつきしゅよう）、すなわち白血病や悪性リンパ腫などの血液がんです。茨城県立中央病院血液内科では、腫瘍内科と密接に連携しながら、造血器腫瘍を中心とした治療を行っています。

血液細胞は骨髄（ずい）、骨髓（こつずい）でつくられます。鶏の骨を折ると中身が赤く見えますがここが骨髄です。骨髄で血球細胞がつくられる仕組みを造血（ぞうけつ）と言います。そこには造血幹細胞（ぞうけつかんさいぼう）と呼ばれる、血液細胞を作り出すおおもとの細胞が存在します。造血幹細胞は分裂すると、一方は自分と同じ能力を持つ細胞、一方はこれからいろいろな血球細胞に変化していく細胞にわかれます。後者

は分裂を繰り返し、数を増やしながら、それぞれの血球へと変化していきます。この過程を分化といいます。分化段階のはじめの方の細胞（前駆細胞といいます）ががん化したのが白血病です。白血病にはゆっくり進行する慢性白血病と、急速に進行する急性白血病がありますが、一般の白血病のイメージは急性白血病だと思われます。急性白血病ではがん化した異常な前駆細胞が骨髄にぎっしりと増えてしまい、正常の造血ができなくなってしまいます。よって症状としては、免疫力が低下して感染症を起こし高熱が出たり、高度の貧血や出血傾向が生じたりします。がん化した細胞をやっつけて正常な造血を取り戻すには抗がん剤治療が必要になります。この間、免疫力が非常に弱くなりますので、いわゆる「クリーンルーム」などで患者さんを治療することがあるのはこのためです。

もうひとつ、よく聞く血液の病気にリンパ腫があると思います。リンパ腫は正式には悪性リンパ腫と言われ、白血球の一部であるリンパ球ががん化した病気です。白血病でがん化するのとは、造血幹細胞に近い段階の前駆細胞ですが、リンパ球は前駆細胞が分裂を重ね、特定の役割をもつようになった細胞です。リンパ球は血液中や骨髄のほかに、リンパ節や扁桃（いわゆるのどの扁桃腺など）、腸や気管の粘膜に多く存在し、ウイルスや細菌などの病原体から体を守っている細胞です。かぜを引いたときに首のリンパ節や扁桃腺が腫れるのは、リンパ球など免疫を担う細胞が病原体をやっつけるために増えるからです。このため、リンパ球ががん化すると、体のリンパ節のあちこちがはれたり、消化管に腫瘍（がん細胞など異常細胞が増えることによって出来る「できもの」）ができたりします。リンパ球は体のあちこちに存在し、また入り込むことができるため、これら以外にもいろいろな臓器に腫瘍をつくり得ます。診断には、腫瘍の一部をとって病理医に診断を仰ぐ生検（せいけん）が必要になります。この様に書くと、このリンパ節はリンパ腫だろうか？と心配になる方がいらっしゃるかもしれません。リンパ節の腫れは、一時的なウイルス感染からリンパ腫以外のがんまで、非常に多くの原因で起こります。かぜなどで数日間首のリンパ節が腫れる場合は心配はいりませんが、長く続く場合や、自覚症状に関わらず全身あちこちのリンパ節が腫れる場合は、医療機関を受診しよく調べていただくことをお勧めします。

血液の病気はまだまだまだたくさんあり、茨城県立中央病院ではどのような血液の病気にも対応しております。また次回、血液の病気についてお話の続きをさせていただきます機会を楽しみにしております。



急性白血病の細胞像



筑波大学
University of Tsukuba

筑波大学附属病院 茨城県地域臨床教育センター

〒309-1793 茨城県笠間市鯉淵6528 ☎0296-77-1121

ホームページ <http://www.pref.ibaraki.jp/bukyoku/hoken/cyubyo/rinsyokyoiku/index.html>



茨城県